



研修所講師インタビュー 栄一から研修生へ

聞き手●佐藤和佳子 写真●西田太郎

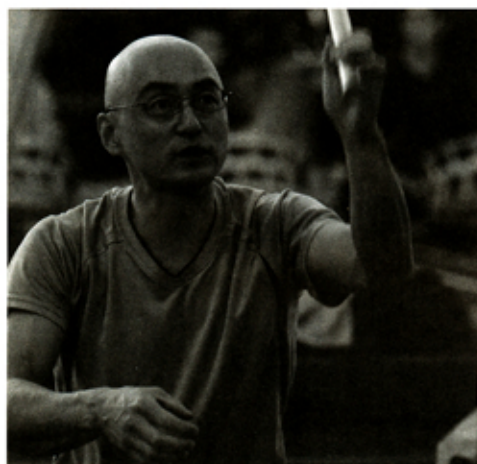
一年生には三宅と千里馬、二年生は三宅を通じて基本や体力作りを教えています。つまり曲に行くまでに「何が大切か」を分ってもらおうということです。

演奏で人を感動させるって並大抵じゃないよね。大太鼓十屋台囃子の演奏は、もちろん感動する。けれど、それは体力や大変なことをしている生き方への感動でもあるよね。でも感動ってそれだけじゃないんだな。吉利さんは体力だけで人を感動させているわけじゃないから。それは吉利さんの色々な人生経験であつたりするんだよ。そういうことを君たちここで学んでいるんだ。

じゃあ感動って何かというと、例えば朝起きてパッと見たらすごい晴れ。まず「天気がいいじゃない！」ってこれを感じて喜ぼうよ。俺だったら喜ぶよ。で、走ろうとしたら風が冷たい。昨日の雨でこれだけ気温が下がったんだと季節を感じられるでしょ。で、また見たら、この前まで色付いてなかった柿がオレンジ色になっている。朝起きて外へ出ただけで、これだけ感じられるじゃない。そういう感覚を磨いていかないと感動なんて分らないよね。

夢は憧れじゃなくて、日々のそういったさりげないことが大事。その日を楽しむとか、そういうことが大事なんだよ。

でも、そういう感覚は恐らく「遊ぶ」心なんだよな。くだらないけれど面白いものをいかに楽しく遊ぶか。くだらない事ほどのめりこむと面白いよね。それを、とことん煮詰める。例えば休日だけでも凝りまくって食事を作るとかね。三宅の地打ちのニュアンスにこだわることも、そ



うだよな。今は強制的だけれど、そういうものに磨きをかけると凄味が増していく。つまり舞台上で太鼓を叩くというのは、人生を楽しんで感覚を磨くこと。「心技体」って言うのは簡単だけれど、固いじゃない。精神力がどうのじゃなくて、もつとこだわって感性を磨き、鍛える。もちろん、こだわる所は、それぞれ違っていると思うよ。

今は学ぶことやマスターすることに一杯一杯で、自分で考えることが少ないよね。でも、夢に向かう中で、やっていることや講義は、どういう意味があるのか自分で考えて繋げてみる。でも変に頭でっかちになって方向性を作ってしまったらダメだよ。

研修所では学べる機会が一杯あるじゃない。他の人は経験できないことが沢山できるんだよ。すごいことだと思えば、自分で気が付かなければ見えないもの一杯ある。毎日一つでもいい。新たな発見を自分で探して見つけて欲しいです。

講師の先生方(敬称略)

- 佐藤利夫 [講義] 佐渡研究者
 - 福島徹夫 [講義] 元・新潟県栽培漁業センター所長
 - 桃井宗生 [茶道] 裏千家学校茶道教授
 - 松永政雄 [能] 宝生流教授囃子
 - 幸清流小鼓準職分
 - 小笠原匡 [狂言] 能楽師和泉流狂言方
 - 金城光枝 [琉球舞踊] 琉球舞踊家
 - 岩手県盛岡市・黒川さんさ踊り保存会 [黒川さんさ踊り]
 - 中島育子 [秋田・西馬音内盆踊り]
 - 岡田京子 [歌] 作曲家
 - 伊藤多喜雄 [唄] 民謡歌手
 - 赤塚五行 [俳句] 新潟日報佐渡版俳句選者
 - 熊田勝博 [講義] 照明家
 - 葛原正巳 [陶芸]
 - 西須狗治 [木工] 指物師
 - 岩崎ちひろ [魚のさばき方] 魚屋
 - 松田祐樹 [講義] 佐渡の芸能研究者
 - 渡辺亮 [サンバ] パーカッションニスト
 - 狩野泰一 [笛] 篠笛奏者
 - 金子竜太郎 [太鼓など] 和太鼓奏者
- 鼓童メンバー講師**
- 内容/太鼓、踊り、唄、笛、身体ケア、農作業、造形、講義、生活全般など
- 講師/大井良明、藤本吉利、小島千絵子、藤本容子、大井キヨ子、山口幹文、齊藤栄一、見留知弘、(補佐)辻勝、船橋裕一郎、砂畑好江、阿部研三、青木孝夫、菅野敦司、赤嶺隆、山口康子、千田倫子、石原泰彦、後藤美奈子、松浦充長